

理工学部 of これまでとこれから — 国際化を肌で感じる —

国際戦略室

理工学部 志賀 聖 一

1. 活躍する卒業生

この記事と同時にたまたま研究室の紹介記事のある学会誌に執筆していた。私の3つ前の教授が1989年に中国で5日間の講演をしたことから書き始めた。ちょうどそのときの聴講生のうち二人が、後に私の前の教授の指導で博士をとり、そして私のところに中国政府派遣研究者として2年間滞在した。前者は隆 武強氏であり、大連理工大の内燃機関研究所の所長となり、工業会（理工学部のOB/OG会）中国支部の初代支部長として当時の鈴木学長が表敬した。後者は黄 震氏で、上海交通大学の副学長として、昨年平塚学長を表敬し、本学の第一回 Guest Professor の称号を授与された。なんと29年前の学生がまさにいまの中国の内燃機関研究をけん引しているのである。材料力学では、龔 徳春北京大教授（現中国支部長）、王 加友江蘇科技大副学長、そして游 天貴（帰化後、根津辰之）勤益科技大教授（台湾）、など数多くの卒業生が活躍しており、いまの国際化に大いに貢献している。最近でも、大連理工大、西安交通大、北京交通大、瀋陽化工大などの有力校からの留学生が来ており、東北大（遼寧省随一と言われる名門校）卒業生も入試を受験し、合格している。彼らが、活発な工業会中国支部活動をまさに支えており、理工学部創立100周年では、100万円の寄付を実現した。さらに、母校での支部総会とともにICAEE 2016という国際会議も実現し、本年3月には、第二回となるICAEE2017を太田キャンパスで開催し、第3回は2018年10月に重慶交通大で開催される。

とは言え、我が国の国際的位置は当時よりだいぶ低下している。大学ランキングでも、東大は清華大、復旦大、よりも低く、相対的には留学の魅力も低下していると言っていいだろう。したがって、黙っていても留学生が来た時代よりは、留学生の獲得はより困難になってきていると言っていい。

2. 最近の留学生数

本学の留学生数が最大だったのは、2010年の298名である。これは割合にしておそらく4.5%ほどとなり、全国平均を上回っていたと思われる。しかし、これ以降漸減が続き、2016年には225名と、割合で3.5%となり、2016年の全国平均5.7%を大きく下回った。留学生30万人計画がつくられた2008年当時はしたがって、本学が国際化をリードできる可能性がまだあったのが、いまや大きく立ち遅れていることは明らかである。留学生30万人は、当時の14万人の倍増以上であるが、2018年現在19万人と3割増となっており、あと2年で30万人達成は容易ではない。とは言え、本学はむしろ減少の一途となっており、危機的状況である。

3. 国際化の意義と対応

大学の国際化は、異なった文化を持つ人々の切磋琢磨と18歳人口減少への対策、という二つの意義があると言われている。どちらも、とくに地方の大学にとってはたいへん重要である。そのための対応として、文科省は5点あげている。興味（大学の宣伝）、入試（在外受験）、魅力（英語授業、ダブルデグリー）、奨学金の拡充、そして就職である。

興味をもってもらうためには、海外拠点や、上記の卒業生が有効である。入試も海外拠点があれば十分対応できる。英語授業とダブルデグリーは強力なリーダーシップが必要であるが、できないことはない。ハノイツイニングの問題も、英語授業の拡充で解決できる。ダブルデグリーは、上記の29年前には、積極的に留学生を受け入れる大学が少なかったことを考えれば明らかで、ほかがやるのを待つ姿勢が許されるわけではない。奨学金は、現在ほぼ半数の学生が受給できているが、地域との連携強化などにも期待したい。その奨学金のうち、マレーシア政府の割合が驚くほど高いことがわかった。マレーシアは、ワシントンアコード（工学教育の世界認証機関、日本はJABEEが担当している）の認証を留学の条件にしているため、理工系として本学では、環境創製理工学科の社会基盤コースと機械知能システム理工学科のみが受け入れ可能となっている。最後の就職については、かつての困難さが夢のようであり、いまや女子学生と留学生は引く手あまたと言っている。

4. 提 案

- (1) 29年前を思い出そう。当時の積極姿勢がいまをつくったのである。いま躊躇している、海外拠点、ダブルデグリー、クォーター制、英語授業のすべてをできるかぎり実施してゆく。
- (2) MoUの多様化。有力校からより多様な大学と積極的な交流を強めてゆく。IIT、ソウル大に行く意欲ある学生は限られる。レベル、国ともに対象を広げてゆく。
- (3) アジアのEnglish Nativeの活用。とくに英語授業に、インド、バングラデシュ、シンガポール、香港、フィリピンなどのEnglish Nativeの大学との教員の交換留学制度を実現する。

あとがき フランスの航空大学IPSAはすべて英語授業であった。インドやバングラデシュの教員、学生の英語力はまさに母国語のレベルである。英語圏のイギリスの留学生は2割を超えた。国際化と英語化はいまや同等と言える。本学では英語の得意な留学生は、不得意な先生を気遣ってあえて英語を使わないのが現状である。日本の科学技術への憧れはまだすたれていない。いまのうちにできることはとても多いことを肌で感じた。